



もっと伝えたい、久留米城の歴史

あなたの
知らない

久留米城

久留米城跡は久留米市街地の北西部に位置します。永正年間（1504-1521）に築城され、天正 15 年（1587）には毛利秀包が城主となります。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦い後、筑後国に封じられた田中吉政の支城として整備されますが、2 代忠政の代に改易となります。

代わって元和 7 年（1621）に丹波福知山から有馬豊氏が筑後北半 21 万石の大名として入城し、荒れ果てた城の大改修に着手しました。

以降、明治 4 年（1871）の廃藩置県まで有馬氏の居城でしたが、同 8 年（1875）までに建物は解体され、同 12 年（1879）、本丸跡地に旧藩主を祀る御霊社（現篠山神社）が建立されました。

昭和 58 年（1983）には福岡県指定史跡に指定され、平成 29 年（2017）には公益財団法人日本城郭協会より続 100 名城（183 番）に選定されています。

1. 鯨は城のシンボル

鯨（^{しゃち}しゃちほことも読む）は、頭が虎、胴体が魚という想像上の霊獣です。天守の大棟^{おおむね}に向かい合わせで一对が載せられています。天守以外の隅櫓^{すみやぐら}や門にも取り付けられます。出火した際には口から水を出して消火すると伝えられ、これらの重要な建物を火災から守っていました。

天守の屋根に上げられた鯨として最も著名な城といえば、名古屋城でしょう。雌雄一对の鯨は、^{よせぎ}寄木作りの芯に黄金の板を打ち付けたもので、竣工当初に使われた金の量は慶長大判1,940枚（純金換算量215.3kg）に上ります（その後、藩財政の悪化と共に3度にわたって金板を改鋳、戦災で天守と共に焼失）。まさしく、徳川御三家の筆頭尾張徳川家の城のシンボルとして輝きを放っていました。

さて、鯨を城の天守に初めて採用したのは、織田信長の安土城でした。この鯨は、瓦の表面に金箔を押したのですが、これ以降の鯨は殆どが瓦製となります。瓦製の鯨は重量を軽くするために中空になっています。割れ易く、ほとんどの場合、遺跡からは小さな破片の状態で見られます。

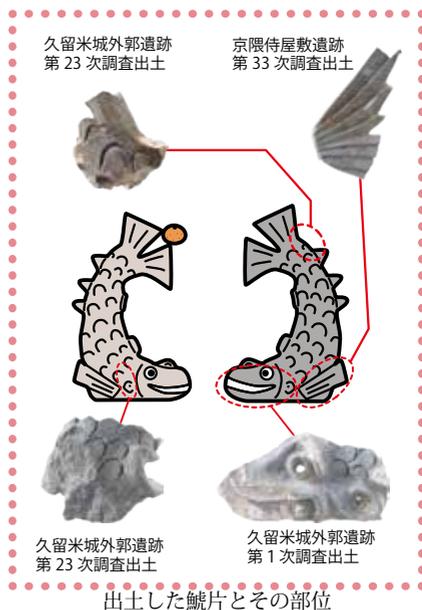
久留米城外郭遺跡の発掘調査では、計5点の鯨瓦が出土しています。第

23次調査の2点は、その特徴からも天正年間（1573 - 1592）後半以降に製作されたと考えられます。

天正15年（1587）には毛利秀包が城主となり、慶長6年（1601）には、筑後国主として柳河に入城した田中吉政の支城となります。鯨瓦の大きさから毛利代か田中代の久留米城の櫓か門の屋根を飾ったものでしょう。

また、第1次調査で出土した鯨は、有馬代の18世紀後半ごろに廃棄されたものですが、佐々木家屋敷内から出土しており、武家屋敷の建物で使用されたと考えられます*。

*有馬代の鯨瓦については、他に篠山神社所蔵品が知られています。



2. 久留米城、7つの謎を探る

謎①久留米城？篠山城？どちらの名前が正しいの？

通称医大通りにある交差点「篠山城前」。そのすぐ北側の観光表示板には「久留米城跡」とあります。どちらが本当の名前なの？と戸惑う方も。

この城は永正年間（1504 - 1521）に松田なにがし某によって築城されたと言われます。ここは筑後川に面した小山（小笹山）で、小竹が生えてこんもり茂っていたことから「笹原城」と呼ばれたそうです。

その後、天正年間（1573 - 1592）になると、「久留米城主」として高良山せ座主良寛すりようかんの弟麟圭りんけいの名前が見られます。

これ以降、毛利代、田中代を経て、有馬代と続きますが、江戸時代を通じて「久留米城」は、正式な名称でした。

ところが明治4年（1871）に廃藩置はいはんち県となり、長らく続いた封建社会も終わりを告げ、新しい時代が幕を開けました。

同6年（1873）には町名が改正され、城内は小笹（篠）山という旧名ちなに因んで、篠山町ささやままちと改称されました。

その前年から同8年（1875）にかけて、二ノ丸や本丸の御殿や櫓が解体され、その部材や土地は入札で各所に引き取られました。

やがて本丸の石垣まで取り壊されようとした時に、あまりに忍びないとい



本丸跡地に建立された篠山神社

うことで緒方安平ら久留米の有志が買い戻したと言われます。

その後、旧藩士たちが中心となり、旧藩主を祀る御霊社の建立を計画しました。明治12年（1879）には、本丸跡地に社殿が完成。所在地の地名から篠山神社と称し県社となります。

こうして久留米城跡は、旧藩主まつを祀る篠山神社が所在する城跡ということから、「篠山城」という呼び名が急速に浸透していきました。現在でも、「篠山城」と呼びならわす方が多いかもしれません。

しかし、歴史的な経緯けい いからみると、この城の実名は「久留米城」、通称は「篠山城」と言えるのではないのでしょうか。もちろんどちらも間違いではありませんが、県史跡に指定された際は、本来の名称ということで、「久留米城」の方を採用しています。

謎②なぜあの場所に造ったの？

阿蘇外輪山に源を発する筑後川は、中流域の久留米市で西から南西方向に流れを変えます。久留米城の本丸は川縁の小山に築かれ、西は筑後川、北と東は湿地帯に囲まれる天然の要害の地です。

三方を河川や湿地に囲まれることから、縄張りは本丸の南側に二ノ丸、三ノ丸、外郭と連なる連郭式を採用しています。城の前面である南側は、西から京隈小路、庄島小路、十間屋敷、楡原小路、鉄砲小路などの侍屋敷で取り囲むように配置。街道から城下への入口や川港である瀬下町には寺院を集め、城や城下の防衛線を形成しています。

一方、久留米は古来、九州を縦断、横断する街道が相交わる地であり、周囲の諸藩へ通じる分岐路が整備されました。筑後川にも城の外濠としての機能のほかに、水上交通の動脈としての重要な役割がありました。

農村から年貢として徴取した藩米の蔵入れと大坂蔵屋敷への海上運送、更には、菜種や蠟・紙といった国産物に加え、幕末には久留米緋などの他領への輸出に利用されました。

このように、久留米城は天然の要害であるとともに、筑後地方における政治経済、水陸交通の要として重要な場所に立地していたのです。



久留米城下の範囲 [天保年間 (1831 - 1845)] 絵図 (久留米市教育委員会所蔵) に加筆

謎③建築資材はどこから運んだの？

筑後川が天然の外堀を兼ねる久留米城の建築資材は、水運によって運ばれたであろうことは想像に難くありません。

慶長5年（1600）ごろ、キリシタン大名毛利秀包^{ひでかね}夫妻が城下にキリスト教天主堂を建てる際には、木材を薩摩から運んだと言われます。

また、元和7年（1621）に有馬豊^{とよ}氏^{うじ}が入国し、久留米城の大修築が開始されました。その際、建築部材は元和の「一国一城令」で廃城となっていた領内の5城（城島^{えのきづ}・榎津^{あかじ}・福島^か・黒木^か）を解体して運び、石材（花崗岩^{こうがん}）は田主丸の石垣付近から切り出したと思われる。

これらは筑後川本流や支流である矢部川、巨瀬川^{こせ}沿いにあり、舟により久留米城付近に集積したのでしょう。



城島城絵図（久留米市教育委員会所蔵）



久留米藩の領域と建築資材の供給先

謎④なぜ天守がないの？

久留米城には天守がありません。

天守は近世の城のシンボリックな存在で、姫路城や松本城など、現存する天守の威容と美しさは、お城ファンのみならず、魅力を感じる方も多いのではないのでしょうか。それなのに久留米城には…。

さて、そんな久留米城本丸には隅櫓すみが7つありました。櫓間は二重二階たもんの多門櫓たもん（渡り廊下構造）でぐらりと連結し、その囲みの内側に本丸御殿を配置するという、名古屋城本丸に似たそうれい壮麗で厳重な構造でした。

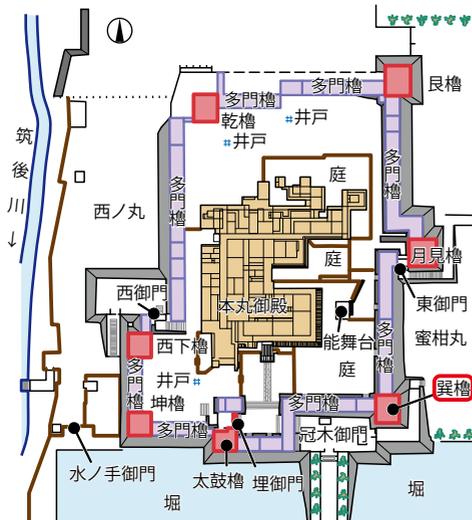
しかも隅櫓の標準型は重層造ですが、久留米城は、全てが三重（月見櫓は二重説あり）になっていました。



異櫓の二段石垣（東面）

最も大きい櫓は、南東隅にある異櫓たつみです。平面規模は、13.8 m × 11.8 m もあり、別格扱いで「大櫓」や「異御櫓おん」と呼ばれていました。

この異櫓ですが、平面規模から見ると、丸岡城や宇和島城、丸亀城、弘前城などの現存する三重三階構造の天守よりも大きかったと考えられます（6頁表参照）。



本丸の建物配置と異櫓の位置
（篠山神社所蔵絵図をトレース後、加筆）

「武家諸法度」
 ・元和令【元和元年（1615）】
 諸国の居城、修補をなすといえども、必ず言上すべし。いわんや新儀の構営堅く停止せしむる事。
 ・寛永令【寛永十二年（1635）】
 新規の城郭構営は堅くこれを禁止す。居城の障壁・石壁等破壊の節は、奉行所に達し、差図を受く可きなり。櫓・堀・門以下は、先規の如く修補すべき事。

天守の規模比較表

城名	平面規模 (m)	高さ (m)	構造	築造年など
久留米城巽櫓	13.8 × 11.8	?	層塔型・三重三階	寛永年間 (1624 - 1645)
弘前城	11.8 × 9.8	14.4	層塔型・三重三階	文化元年 (1810) 改修
丸岡城	13.4 × 11.5	12.5	望楼型・二重三階	慶長 18 年 (1613) 頃
備中松山城	14.0 × 10.0	11.0	望楼型・二重二階	天和元年 (1681)
丸亀城	11.8 × 9.8	14.5	層塔型・三重三階	万治 3 年 (1660)
宇和島城	11.8 × 11.8	15.8	層塔型・三重三階	寛文 6 年 (1666) 頃



「絵入旅日記 坤」に描かれた久留米城本丸
(三重県立図書館所蔵)



久留米城本丸模型 (有馬記念館所蔵)

右手前の三重櫓が代用天守の巽櫓

他の城の天守より規模が大きいのに、なぜ天守と呼ばなかったのでしょうか。それには、「一国一城令」や「武家諸法度」の存在があったようです。

元和元年 (1615) の「ふけしよほつと一国一城令」や「ぶけしよほつと武家諸法度」以降、築城や修復については、幕府への届出が義務付けられ、厳しく制限されました。

「武家諸法度」の発布以降に建築の申請をした場合、各藩は「天守」ではなく、「櫓」として届け出ました。実質的に天守でしたが、公式には認められないので、天守代用として「おせんがい御三階櫓」「さんじゅう三重御櫓」「おお大櫓」などと呼び

ました。

徳川御三家の一つ、水戸徳川家の水戸城も例外ではありません。三重五階建ての巨大な櫓を本丸ではなく二ノ丸に建築し「御三階櫓」と呼びました。

武家諸法度には、天守に関する細かな規定はありませんが、そこには、幕府に対する遠慮や気遣い、そんたく忖度が働いたのでしょう。

現存する他の天守よりも大規模だった久留米城の巽櫓。建築時期が遅かったために公式に天守と名乗れなかった、まさに悲劇の天守といえるかもしれません。

謎⑤石垣がバラエティに富んでいるのはなぜ？

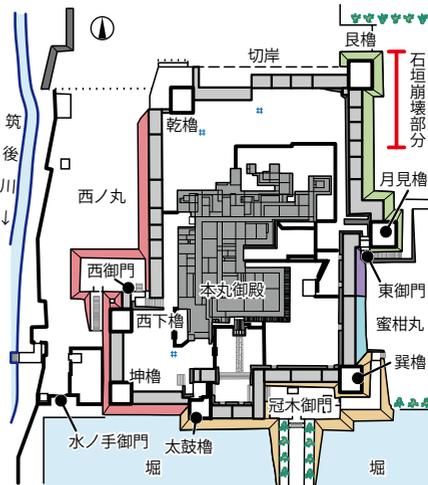
久留米城は「石垣の博物館」とも呼ばれています。それはなぜなのでしょう。

石垣を観察していくと、野面積みから加工石の布積に至るまで、60年以上の時間をかけて、東面石垣から南面、西面へ

と時計回りに築造されたと思われます。

田中代の慶長7年(1602)には、穴太^あとして、そかの理右衛門と橋本源兵衛が任命されており、少なくともこの頃には、石垣の普請が始まったようです。

段階	内容	石材	年代	備考
第1段階	野面石・粗割石を乱積	片岩 安山岩	天正年間 (1573-1592)	毛利代？
第2段階	野面石・粗割石を布積	片岩 安山岩 花崗岩	慶長年間 (1596-1615)	田中代？
第3段階	粗割石を乱積、隅角は加工石を算木積	花崗岩	元和年間 (1615-1624)	有馬代
第4段階	規格化が進んだ荒割石を布積	花崗岩	元和～寛永	有馬代
第5段階	加工した規格石を布積	花崗岩	寛永年間 (1624-1645)	有馬代



石垣加工技術の変遷

※穴太…石積の専門家

東面石垣から普請^{ふしん}に着手したことを裏付ける史料も残されています。「筑前筑後肥前肥後探索書」は、有馬豊氏^{とようじ}の入城6年後の寛永4年（1627）、幕府の隠密^{おんみつ}が久留米藩の申請通りに工事されているか、偵察^{ていさつ}のため来久した際の報告書です。

同報告には、本丸、二ノ丸、三ノ丸、四ノ丸（外郭）それぞれの規模や堀の幅、土居の高さなど、詳細な記述があります。また、本丸の入口は東側で不明の門があり、南側には新たな枡形^{ますがた}が造られようとしている点も重要です。これは、以前の毛利・田中代の久留米城が東向きであったのを有馬氏が南向きにあらためた事を示しています。

また、東側は二重屋根の多門で、三重の隅櫓があるとし、本丸の建設が東側から進められた様子がわかります。石垣については、東面のみでほかの三面は自然の露頭もしくは切岸のままでした。

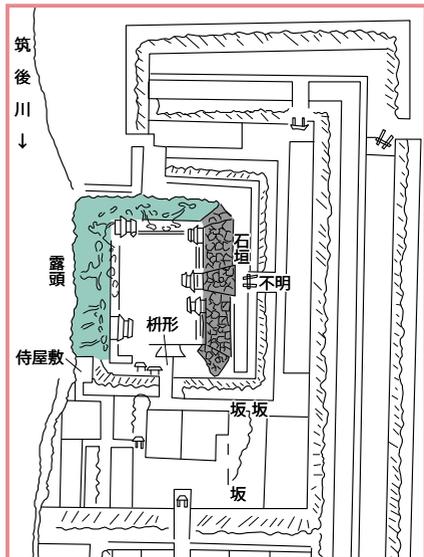
次にご紹介する史料は、寛永21年（1644）の「筑後久留米本丸絵図」です。原因は不明であるものの、南面石垣のうち崩壊した冠木門から西側と長屋（多門櫓^{かぶきもん}）の修復を幕府に願い出た際の写し（手元の控）と思われるものです（9頁図参照）。この絵図からは、東面石垣に次いで、南面石垣の構築と

補修が行われたことがわかります。

ただし、本丸の西側と北側については、自然露頭や樹木が生えた小山の斜面のように表現されており、石垣が存在しなかったと思われます（9頁下段図参照）。

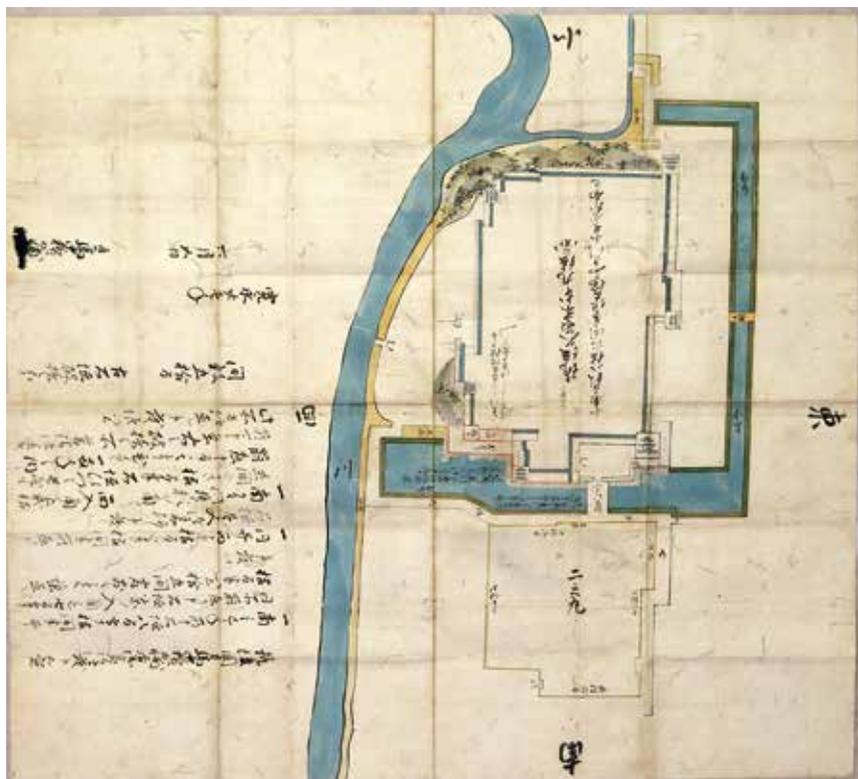
次に江戸中期～末期頃の久留米城絵図を見ると、西面に石垣が構築され、かつ筑後川からの出入りも西入から南入りに変更されています。ただし、城の裏側に当たる北面は最後まで石垣が築かれることはありませんでした。

以上のように久留米城の石垣は長い時間をかけて造られたため、バラエティに富んでいるのです。



「筑前筑後肥前肥後探索書」（九州史料叢書16）をトレースし加筆。網掛けは石垣。

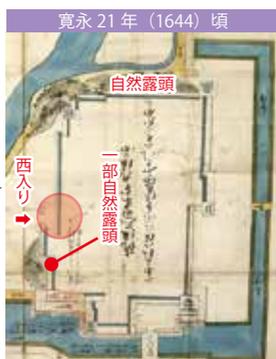
2. 久留米城、7つの謎を探る



「筑後久留米本丸絵図」(久留米市教育委員会所蔵)



「筑前筑後肥前肥後探索書」(『九州史料叢書』16所収図(部分))に加筆。



「久留米城本丸絵図」(部分)(久留米市教育委員会所蔵)に加筆。



「日本古城絵図久留米城」(部分)(国立国会図書館ウェブサイト)に加筆。

久留米城本丸の変遷

謎⑥平和な時代の櫓の役割は？

久留米城には7つの隅櫓すみやぐらがありました。櫓は城の重要な防衛施設で、矢を収納した武器庫であり、戦の際には物見となり、矢を射る場所ともなるため、「矢倉」とも書きます。

通常、屈折した石垣の隅に建築されることが多く、「隅櫓」とも呼ばれます。呼称は、城の中心部から見た十二支の方位で呼ばれることが多いようです。

久留米城の場合も、南東隅の巽櫓たいこから時計回りに太鼓櫓ひつじさる（南）、坤櫓いぬい（南西）、西下櫓うしどら（西）、乾櫓うしどら（北西）、艮櫓うしどら（北東）、月見櫓（東）となっています。

これらの隅櫓は、二重（二階建て）の多門櫓たもんで連結されています。内部には、戦に備えて大量の武具や弾薬、食料が蓄えられていました。

寛文9年（1669）の記録では、北東隅の多門櫓から西側に57石分、34桶みそだるの味噌樽を貯蔵していたことがわかります。また、文政元年（1818）に多門櫓に収納されていた武具類には、具足50領、竹具足82領、足軽具足912領のほか、軍用幕166張、軍幕串120本、陣貝、番刀、脇差、陣鐘などがありました。これらのうち古くなったものは、修理・更新されました。

特殊な櫓もあります。太鼓櫓は、見晴らしのよい本丸正面にあり、太鼓が備えられて城下に時を告げました。月見櫓は、高良山に上る満月を鑑賞するためのもので、御殿の奥向き近くにつくられ、東壁面には大きな窓が開いていたと考えられます。



明治初年、解体前の久留米城本丸。右端の建物が巽櫓。（久留米市教育委員会所蔵）

謎⑦本丸御殿はどなたとどこだった？

本丸は、隅櫓と多門櫓で囲まれていましたが、出入口は4か所ありました。

まず、正面中央が表門で冠木御門と呼ばれます。門の右手には、代用天守の異櫓がそびえ、左折れの内枳形に入り、緩い上りを進んで櫓門をくぐり進むと、右手に本丸御殿への石畳と御式台と玄関が目に入ります。藩主の出入りには、この門を使用するのが通例でした。

藩主が水運を利用する場合は、本丸西側から水之手（西ノ丸）に下り、水之手御門から筑後川に出て乗船しました。他に、本丸東側の腰曲輪である蜜柑丸みかんに面したところで、異櫓下から石段を上るルートと月見櫓南側の石段を利用

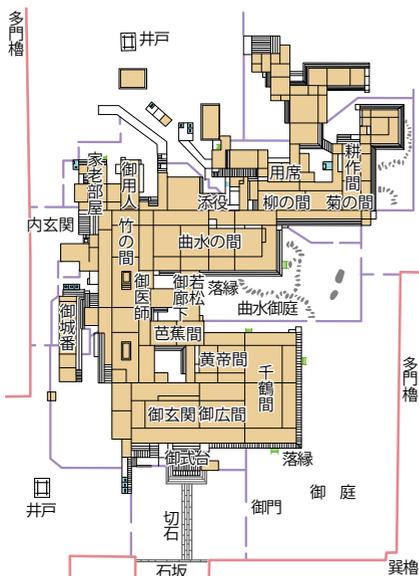
して本丸に至るルートがありました。

本丸内には、多数の建物が廊下などで連結されて構成される御殿がありました。ちょうど現在の篠山神社の拝殿と本殿がある場所です。

本丸御殿は、藩主の居住空間とともに、藩主と家臣がその主従関係を確認するための対面の儀式が行われる表御殿や、家老らが協議しながら藩政を執り行う部屋、家臣が役職や身分ごとに待機する部屋や執務室、台所、井戸3基、北東側と曲水の間の前面にはそれぞれ庭などがありました。各部屋には、それぞれの名にちなんだ障壁画しょうへきがが描かれていました。

9代頼徳よりのりの時には、曲水の庭の南東側に能舞台が建設されています。能は藩士のほか城下の町別当や大庄屋なども招待されることもあり、皆で大いに楽しんだ記録が残ります。

一方、現在ブリヂストンのりふさの工場がある二ノ丸跡にも御殿がありました。享保6年（1721）、6代則維によってそれまでの本丸御殿に加え、新たに別館を建築、二ノ丸御殿と称しました。当初は藩主がくつろぐ場として利用されていましたが、7代頼庸よりゆきは花畑御殿と称して居住、10代頼永よりとは再び本丸御殿に居を移しています。



明治4年（1871）の本丸御殿。『富原文庫蔵陸軍省城絵図』掲載図をトレースし加筆。

年表 久留米城の築城修復から解体まで

城主	元号	年	西暦	事柄	文献
不明	永正		1504～20	小竹原に城が築かれ篠原城と名付けられる。	「久留米城之記」
不明	天文		1532～54	御井郡の土豪が城を再構築。	「久留米城之記」
丹波麟圭	天正		1573～87	高良山座主良寛の弟麟圭城主となる。	「久留米城之記」
毛利秀包	天正	15	1587	7月、毛利秀包入城。久留米城改修、大手門は東面。本丸が狭く、有馬代の二ノ丸東側新たに拡張。	「久留米城之記」
田中吉政	慶長	6	1601	3月、田中吉政入国。久留米城主は次男則政。	「田中興慶記」
		7	1602	石垣の穴太には、そかの理右衛門・橋本源兵衛を任命。	「慶長七年台所入之掟」
				本丸に堀、矢倉、門、二ノ丸三ノ丸の堀を深くして土居を高める。	「家勤記得集」 「田中興慶記」
初代有馬豊氏	元和	7	1621	3月、有馬豊氏入城。城郭を修築、門を構え、御殿造営。	「家勤記得集」
				榎津・城島・福島・黒木・赤司5城を破却し、その材を使用。	「米府年表」
		8	1622	堀を拡張。普請進む。	「米府年表」「石原日記」
	9	1623	大手門を東から南に改める。城・堀・土屋敷建築進む。	「米府年表」	
	寛永	8	1631	堀完成。柳原堀は肥後加藤家支援。城造り全般について、筑前の黒田長政から支援協力。	「米府年表」
2代忠郷 ↓ 忠頼	寛永	18	1641	本丸南面石垣が破損（同21年に修復願）。	「筑後久留米城本丸絵図」（写）
		21	1644	本丸南面石垣が広く崩壊もしくは歪み、また多門櫓の一部もくずれかかっているため、幕府へ修復願い。	「筑後久留米城本丸絵図」（写）
	慶安	2	1649	1月、柳原東北外郭の堀を南隅まで浚渫、土居を高める。	「家勤記得集」 「米府年表」
		4	1651	11月、外郭東部の堀を浚渫、土居を高める。	「家勤記得集」 「米府年表」
	承応	2	1653	1月、堀を浚渫、土居を高める。	「家勤記得集」 「米府年表」
	明暦	1	1655	1月、二ノ丸三ノ丸南辺の堀を浚渫、土居を高める。	「家勤記得集」
	4代頼元	延宝	4	1676	城内柳原の西側土屋敷を京隈小松原へ移転する。
天和		1	1681	7月、幕府が御城普請を許可する。	「米府年表」
		2	1682	2月、二ノ丸東から柳原門東脇にかけて、堀を新造。	「米府年表」
貞享		2	1685	1月、堀を浚え土居を築く。	「家勤記得集」
元禄		4	1691	1月、柳原外堀の堀を浚渫、土居を高める。	「米府年表」
	8	1695	7月、本丸東石垣が先年以來膨らんだため、印をつけ経過を見る。	「(続)古代日記書抜」	
6代則維	正徳	4	1714	城の普請完成は翌来年か。	「米府年表」
	享保	12	1727	城内柳原の東側土屋敷を十間屋敷（旧麴町）へ移転する。	「石原日記」
7代頼僮	寛延	2	1749	8月二ノ丸花畑御殿御居間完成。	「米府年表」
		3	1750	2月、蜜柑丸の御宝蔵完成。	「米府年表」
8代頼貴	天明	5	1785	5月、外郭追手門完成。	「米府年表」
9代頼徳	天保	9	1838	7月、外郭狩塚門完成。	「米府年表」
明治		5	1872	10月、大手門など各門、二ノ丸御殿、城内家老屋敷の解体が済む。	「諸国見聞」
		8	1875	3月、櫓・大手門はじめ、各門・本丸台所、建物の解体が済み、部材は日田の商人などに売却される。土居を崩し、堀を埋める。	「諸国見聞」
		12	1879	本丸跡地に神社が竣工。篠山神社と称する。	「諸国見聞」 「篠山神社創建書類」

3. 久留米城本丸の発掘調査

久留米城下における発掘調査は、平成元年、城下町（現在の三本松公園）において始まり、令和7年10月現在、137地点で実施されています。しかし、調査した地点のほとんどは、城下町の町屋や侍屋敷であり、城の中心である本丸での発掘調査は、令和2年度まで実施されていませんでした。

久留米城本丸跡の調査は令和3年度から令和7年度まで4回の調査が実施されています。

第1・3・4次調査は本丸御殿周辺で実施しました。第1次調査は本丸南西部、第3・4次調査は本丸北東部、第2次調査は本丸南東部の石垣の調査を実施しています。



調査区の位置

第1次調査では整地跡を確認することができました。この土木技術は、粘土の中に細かな青や緑の石（緑泥片岩）の破片を混ぜ、地盤を強固なものとするもので、大規模な工事が行われたと考えられます。このような整地法は他の城では見られない土木技術です。

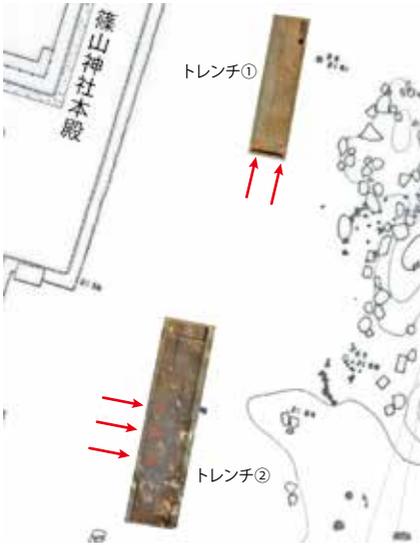
第3次調査は、現在の神社本殿、拝殿の東側で調査を実施しました。本丸御殿は柱の下部に礎石という平坦な石を据えていたと考えられますが、その礎石の下を固めていたと考えられる玉石が見つかりました。この柱列の向きは現在ある篠山神社の拝殿・本殿などと異なり、絵図にみられる本丸御殿の向きと近似しているため、本丸御殿の柱の痕跡である可能



第1次調査 調査区の全景



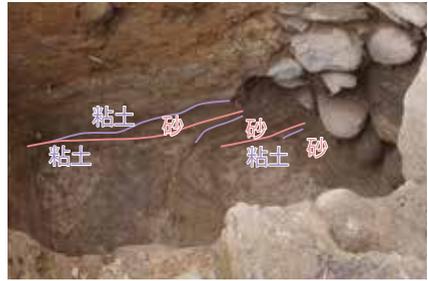
緑泥片岩を混ぜ固くした整地面



第3次調査で確認された柱の位置等性があります。

第4次調査では第3次調査で確認された建物の範囲等を確認し、絵図との相違を確認することを目的としています。

第2次調査では、^{たつみやぐら}翼 櫓 南東部下の石垣基礎部を調査しました。絵図上では堀と^{みかんまる}蜜柑丸の境付近にあたります。石垣の基礎は、蜜柑丸側の北から堀のある南へ向かって階段上に段々と低くなっていました。石垣と堀を同時に築造してい



粘土と砂を交互に積み重ねた地盤

ることがわかります。蜜柑丸側の石垣下位は、均一な砂や粘土を交互に重ね、固く締められた地盤を形成していました。

石垣下部には胴木という木材を敷くこともあります。蜜柑丸側の石垣最下部は小型の角礫を数個敷いてあるのみでした。堀部分の石垣最下部までは掘削できていませんが、石垣が傾いたり、崩れたりしないように胴木が敷かれている可能性もあります。

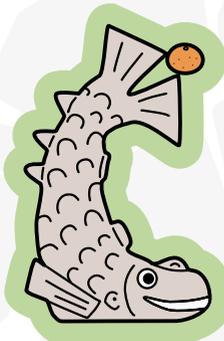
現在、本丸東面の堀は埋め戻されていますが、土層から、昭和の初めまではその一部は残っていたようです。

これまで謎に包まれていた久留米城本丸ですが、発掘調査によって徐々にその構造が明らかになってきています。



第2次調査で確認した石垣

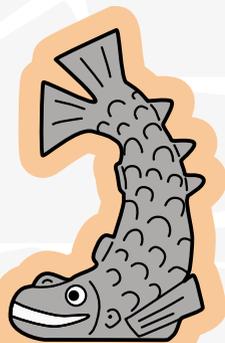
展示公式キャラクターの紹介



しゃちー

久留米城の月見櫓に住んでいるしゃちほこ形の妖精。月見櫓から蜜柑^{みかん}丸を毎日眺めていたら、いつの間にか蜜柑を持つように。久留米城のことをもっと知ってほしい気持ちでいっぱい。

久留米城の翼櫓^{たつみ}に住んでいるしゃちほこ形の妖精。しゃちーより身体が大きく、うろこの数が多いのが自慢。久留米城の魅力広報大使だと（勝手に）思っている。いたずら好き。



ほっこー

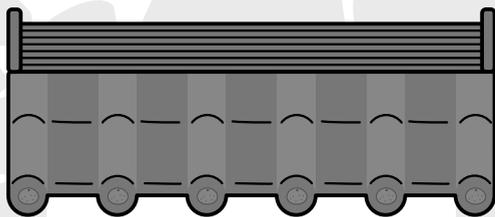


久留米城
復元CGは
こちらから

パネル展

会期 2025.10.15 (水)
- 2025.11.21 (金)

会場 久留米市役所
2階ホワイエ



あなたの知らない久留米城

令和7年(2025)10月15日

発行 久留米市
編集 久留米市市民文化部文化財保護課
〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3
TEL : 0942-30-9225 FAX : 0942-30-9714
E-mail : bunkazai@city.kurume.lg.jp

本冊子は、文化庁の「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の補助を受け、県指定史跡久留米城跡の周知・活用を目的として刊行するものです。